

Ф.И. チュツチェフ政治詩試訳(1)

大 矢 温
岡 部 由 佳
小 林 慎 吾
村 松 多恵子

はじめに

フョードル・イヴァノヴィッチ・チュツチェフの詩作については主に叙情詩を中心に文学研究の分野で研究が進んでいるが、彼の詩作の中で彼の政治思想を反映すると考えられる政治詩についてはほとんど研究業績がない。

本稿は、チュツチェフの詩作の中で、彼の政治思想を反映すると考えられるものを選び、それに日本語の訳を付けたものである。幸い、彼の生誕 200 周年事業の一環として 2002 年から彼の 6 巻本の全集が順次刊行されているので、テキストにはこれを使用した。

1) 海と懸崖¹⁾

荒れ狂いもすれば、轟音も立て、
激しく波立ち、吹鳴し、そして咆吼す——
そして星まで、不動の高みまで
飛びつこうとしているのは……
地獄か、あるいは地獄の力であろうか
煮えたぎる大釜の下で
地獄の業火を燃え上がらせ——

そして奈落を持ち上げ、
ひっくり返したのは？

荒れ狂った波の寄せ波によって
海の波は絶え間なく
咆吼、吹鳴、金切り声、唸り声とともに
岸の懸壁を打っている —
だが波の愚かしさには襲われなかった
不動で、不変の、
現代の我らが巨人は、
宇宙にとってお前は価値がある！

そして戦いで激怒した波は、
決死の突撃の時のように —
再び吠え声とともに
お前の巨大な花崗岩に這い上がる。
しかし嗚呼、不動の石は
嵐のような強襲を二つ折りにし、
粉碎された高波はしぶきとなって飛び散った、
そして無力化された激情は²⁾、
濁った泡になって流れている……
立てよ汝！ 頑強な懸崖よ！

今一時待て —
とどろく波は
お前の足と戦う事に嫌気がさす……
悪ふざけに疲れて、
波は再び従順になる —

そして咆吼もなく、戦いもなく
巨大な足の下で
再び波はおさまるのだ……

荒れ狂う海の波に不動の懸崖を対置し、一見、自然の猛威を描いたこの詩ではあるが、早い時期から、革命的動乱に揺れる西欧にロシアを対置したものと考えられてきた。たとえばЧyтcheфの伝記を書いたИ.С. Аксаковは「この手紙は1848年の二月革命の後に書かれ、明らかに、ロシアに対する凶暴な悪と全般的な反乱に突然巻き込まれた西欧諸民族の荒れ狂った動乱の中のロシアを、その牙城を、描いている」³⁾と記している。

西欧の革命とロシアというモチーフに関してはЧyтcheфの政論『ロシアと革命』などとの関連で解釈すべきであろう⁴⁾。

2) ルーシの地理⁵⁾

モスクワ、ペトロの都、コンスタンチンの都⁶⁾
これぞ皇国ルーシ遺贈の首都……⁷⁾
だがその果てはいずこ？ そしてその国境はいずこ？
北の、東の、南の、日没する方の……？
来るべき時代にそれらの定めを明らかにせん⁸⁾

7つの内海と7つの大河……
ナイルからネヴァまで、エルベから中国まで
ヴォルガからユーフラテスに至り、ガンジスからドナウまで……
これぞルーシの国……しかも永遠に消えることはない
聖霊が予見し、ダニイルが予言したごとく⁹⁾

この詩においてЧyтcheфは、「モスクワ第三のローマ論」を独自に解釈し

て、モスクワ、ローマ、そしてコンスタンチノーポリを含む「インペリア」の再興を構想している。16世紀初頭にプスコフの修道院長だったフィロフェイが説いた「モスクワ第三のローマ論」もまた、ローマとコンスタンチノーポリの後に正教の中心となったモスクワが永遠不滅の正教の都として説かれているが、その根拠は聖書のダニエル書であった。チュツチェフもまた、ダニエルの予言に言及して正教帝国ルーシの首都としてのモスクワの意義を説いている。

3) 夜明け¹⁰⁾

雄鶏が鳴き声を上げたのは初めてではない、
雄鶏は生き生きと元気に勇ましく鳴く、
すでに月は空から消え、
ボスポラス海峡では流れが赤らんできた¹¹⁾。

まだ鐘は沈黙しているが、
すでに東は朝焼けで赤く染まっている、
終わりのない夜は過ぎ去り、
もうすぐ明るい一日がやってくる。

立ち上がれルーシよ！ 今ぞ時は近い！
立ち上がれ！ キリストの務めのために、
すでに十字を切りつつ、
ツァリグラードで鐘を打つ時ではないのか？¹²⁾

響け^{かいん}嘉音の鐘の音よ^ね¹³⁾、
あまねく「東」をその音で満たせ！……
それは汝を呼び、覚醒させる —
立て、男気を出せ、武器を取れ、

信仰の鎧を胸にまとえ、
さあ、偉大な巨人よ！
嗚呼ルーシよ、来るべき日、
全地正教の日は偉大なり！¹⁴⁾

1854年にクリミア戦争によって愛国主義が盛り上がる中で『同時代人』誌にチュツチェフの一連の詩が発表された。この「夜明け」はその中の一編。この詩が実際に書かれたのは1849年だったが、この時初めて発表されたため、当時の人々はこの詩をクリミア戦争と結びつけて受け取ったという¹⁵⁾。つまり、クリミア戦争に先立つ1849年という比較的早い時期からチュツチェフはコンスタンチノーブルの武力奪回と正教主導の元での東西両教会の合同を構想していたことになる。

4) 預言¹⁶⁾

巷に流れたのは噂ではなく、
知らせが生まれたのは我等の内でもなかった——
それは^{いにしえ}古の声、それは天の声である。
「4世紀目は終わらんとす、——¹⁷⁾
来たるべきものは来たる——しかもその時は突然来る！

そしてソフィア大聖堂の^{いにしえ}古の丸屋根は¹⁸⁾、
再び開かれたヴィザンチウムにおいて¹⁹⁾、
再びキリストの祭壇を覆っている」。
その前に身を伏せよ。嗚呼ロシアのツァーリよ²⁰⁾、
そして立ち上がれ！ 全スラヴのツァーリとして——

この詩が書かれたのは1850年のこととされているが、実際に発表されたのは

クリミア戦争によって愛国的世論が盛り上がった1854年のことだった。当時、スラヴ派はニコライ一世がクリミア戦争によってコンスタンチノーポリを奪還する意志がある、と確信しており、他方、東方問題で列強を刺激したくないニコライ自身はこの詩の最後の2行に立腹したと言われている²¹⁾。

この詩においても正教の守護者としてのロシアの役割が謳われている。チュッチェフにとってスラヴの民族性ととともにロシアを構成するもう一つの原理は、「正教インペリア」、つまり正教を紐帯として結びつけられた、ローマ帝国から代々受け継がれてきた権力圏、であった²²⁾。

5) 無題²³⁾

いや、私の一寸法師よ！ 前代未聞の臆病者よ！……²⁴⁾
お前がどんなに萎縮しようと、どんなに怖気づこうと、
その信条浅い心で聖なるルーシをたぶらかせはしない……

それとも、すべての神聖な期待や、
すべての信念を求めつつ、
ルーシは自分の使命を
突然放棄するかお前のために……？

あるいは神が、おまえの怠け心に敬意を払って、
突然歩みを止めてしまうほど、
お前は神にとって大切な存在であり、
神と親しく共にあるのか……？

誰でも望むなら、聖なるルーシを信じるな、——
ただルーシは自分自身だけを信じる、——
そうすれば、勝利の神は先延べしない。

世人の怖じけ心に合わせて。

運命によって約束されたものは、
すでにルーシの揺籃の中にあった。
歴史によって、その全皇帝の信仰によって
遺贈されたものは、――

オレークの親兵が剣により
得ようと徘徊したものを、
エカテリーナの驚たちが
その翼で覆ったものを、――

ヴィザンチンの宝冠と王笏を
あなたは我々から奪うべきではない！……
ロシアの全世界的運命を――
否！ あなたはせき止めるべきではない！……

外務大臣ネッセリローデの消極的な政策を厳しく批判するこの詩は、ネッセリローデが1862年に死亡した後、1868年の詩集に初めて納められている。とはいえ、実際に書かれたのは1850年のこととされているので、このことからチュツチェフはクリミア戦争によってネッセリローデの失政が露見するよりも前からネッセリローデに対して批判的だったことがわかる。ギリシアの独立に見られるようなヨーロッパ国際政治の新しい動き、特に民族の問題に注目し、そこにロシア南進の鍵を見るチュツチェフの目には、親オーストリア派で神聖同盟の精神を遵守しようとする保守的なネッセリローデの外交政策は弱腰外交と写ったのであった。

6) スピリチズムの預言²⁵⁾

合戦の、そして勝利の日は来たり
ルーシを遺贈の国境へと達せさしむ
そして古きモスクワは
その三都の最新の都とならん

チュツチェフは一時、スピリチズムに熱中していたことがある²⁶⁾。降霊会でのテーブル回転によってロシアの運命を占おうとしたのだった。この詩は、降霊会での託宣の形をとっているが、通常、降霊会において霊媒（特に職業的な霊媒）は主催者の意向を反映した託宣を述べるので、この詩もクリミア戦争緒戦のロシア軍の勝利に鼓舞されたチュツチェフの拡張主義的な思想を反映していると考えることができる²⁷⁾。

7) 無題（ニコライ・パーヴロヴィッチに）²⁸⁾

お前は仕えず、神にもロシアにも、
ただ自らの些事にのみ仕えていた、
そしてお前の全ての仕事は、良きも悪きも、—
全てはお前においては嘘だった、全ては空虚な幻だった。
お前はツアーリではなく、はったり屋だった。

「仕えていた」、「幻だった」、「はったり屋だった」と過去形で書かれているが、実際は1855年初頭、つまり、ニコライの生前にチュツチェフが、セバストーポリ陥落に当たってニコライの政治を酷評して書いたもの。

8) ゴルチャコフ公爵に²⁹⁾

あなたは宿命的な使命を背負うことになった、
しかし、あなたを招集したものはあなたを見守りもするだろう。
ロシアにおけるすべて善きもの、すべて生きとし生けるものは
あなたを眺め、あなたを信じ、そして待っている。
騙され、侮辱されたロシアの
名誉をあなたは救った、— これ以上の功績は無い、
今、別の使命があなたに差し迫っている。
ロシアの思想を守り抜きたまえ、魂を救いたまえ……

ニコライ治世下のネッセリローデ外交に批判的だったチュッチェフは、新帝アレクサンドル二世の元で外務大臣に就任したゴルチャコフに対しては高い評価をしている。この詩は1863年のポーランド蜂起の折りに列強がこれを口実にポーランドに触手を伸ばしたのに対してゴルチャコフ外相が強硬な姿勢で臨んだことを称えている。アクサーコフもまた、「伝記」の中でポーランドは「ロシアに対する外交的な十字軍」を実行したのだ、と言っている³⁰⁾。

この詩の最後の行でチュッチェフは「ロシアの思想」に言及しているが、これはペテルブルク外国検閲委員会議長として思想統制に従事していたチュッチェフが、外相ゴルチャコフに対して検閲制度に関して注文したものと考えられる。当時、ロシア政府は、1862年の「出版に関する臨時条例」を経て1865年の「検閲と出版に関する規則」へ至るちょうど改革の過渡期にあったからである。チュッチェフの伝記の中でアクサーコフはこの行を「ロシアの出版を脅かす新しい抑圧」を指していると解釈しているが³¹⁾、この「新しい抑圧」とは62年の「出版に関する臨時条例」では導入が見送られた事後検閲のことと考えられる³²⁾。

9) 無題³³⁾

永きにわたって、霧の後ろに
隠れるのか、ロシアの星よ、
あるいは、光のトリックによって
おまえは永遠に姿を現すのか？

夜におまえを目指して突進する、
食い入るような眼差しに向かって
空虚で偽りに満ちた流星となって
おまえの光は散ってしまうのか。

闇が深ければ深だけ、悲しみが強ければ強だけ、
不幸はより不可避的になる —
誰の旗がそこで海の藻屑となっているのか見よ、
目覚めよ。今を措^おいて時はない。

オスマン・トルコに支配されていたクレタ島のキリスト教住民が異教徒の支配に対して反乱を起こした事件をモチーフにしている。スラヴ民族の連帯とそれを梃子としたロシアの南進はチュツチェフの持論である。

10) 無題³⁴⁾

たとえ真実が地表から消えてしまったとしても
ツアーリの心の中にはそのための避難所がある。
誰がその荘厳な言葉を聞かなかっただろうか？
世紀から世紀へと伝えられていく。

そして今、何だ？ 嗚呼、私たちは何を見ているのだ？
神の客を誰がかくまい、世話するのか？
嘘、悪しき嘘はすべての知性を墮落させ、
全世界は籍身せきしんした嘘となった！³⁵⁾

再び「東」は鮮血で煙る、
再び切り合いが……いたる所で号泣、そして涙があり、
猛威を振るう処刑人達はまたしても正しく、
一方、犠牲者達は中傷にさらされている！

おお、反乱のうちに育て上げられた今世紀よ、
魂が無く、敵意ある知恵を備えた世紀よ —
広場で、議会で、王位で、
至る所でそれは正義の宿敵となった！

しかし、まだひとつ、偉大な避難所がある、
正義のための一つの神聖な祭壇がある。
汝の心中に、彼は、我等が正教のツァーリは、
我等の心優しき正直なロシアの皇帝は、おわす！

前の「永きにわたって……」と同様に 1866 年のクレタ島のキリスト教住民の蜂起をテーマにした詩。トルコに対するクレタ島住民の反乱についてチュッチェフは「戦争に訴えても」これを擁護する「道徳的な義務」があると考えた³⁶⁾。とはいえ、それはあくまでもそれは「道徳的な」ものにとどまるのであってトルコの「完全な根本的な解体なしに」『瓢箪から駒 Deus ex machina』のように「立て直しに着手してはならない」とも考えていた³⁷⁾。

11) スラヴ人たちに³⁸⁾

心からの挨拶をあなた方へ、兄弟たちよ
全スラヴの隅々からの、
我々の挨拶をあなた方全員へ、例外なく！
皆のために家族宴会の準備ができています！
故なくロシアはあなた方を呼んだ訳ではない
平和と愛の祝日に、
だがお存知か、親愛なる客人たちよ、
あなた方はここでは客ではない。あなた方は——身内だ！

あなた方はここで家にいる。
しかも己の故郷の家よりも大きい、——
ここでは、外国語の政権という
支配は知られていない
ここでは、政府と臣下は
一つの、皆のための一つの言語を持っている、
そしてスラヴ人であることは、
重い原罪とは見なされない。

敵意に満ちた運命によって
我等は四散させられたが、
それでも、我等はひとつの民族、
ひとりの母の息子たち、
それでも我等は血を分けた兄弟。
このことこそが、我等が嫌われている理由だ。
ロシアはあなた方のせいで許されない、

ロシアのせいであなた方は許されない！

彼らを驚き、仰天させるだろう
すべてのスラヴの家族が
敵にも味方にも面と向かって
初めて、——それが私なのだ！ と言うことが。
悪しき恥辱の、長い連鎖についての
捨てがたい思い出と共に、
スラヴの自意識は、
天罰のように、彼らを脅かす！

嘘がかくもすばらしく繁茂した
ヨーロッパの土壌には、久しく、
パリサイ人の学問によって、久しく
二重の真実が作られた。
彼には——法と平等、
我等には——暴力と虚偽、
そしてそれらの歴史は
スラヴの遺産として刻み込まれた。

何世紀も続いてきたことは
今も尽滅していない、
しかも我等の上で圧迫する——
ここに集える我等の上で……
古い傷がまだうずく
すべての現代という時代は……
コソボ平原は手つかずだ³⁹⁾
ビーラー・ホラは掘り崩されていない！⁴⁰⁾

我々の間には — 小さな恥 — がある —⁴¹⁾

スラヴの中で、全ての血をわけた仲間の中で、
そいつだけが奴らの失寵の故に立ち去った
そして、奴らの敵意に曝されなかった。
身内にとっていつでもどこでも
一番の悪役だったそいつが、だ。
奴らは我等のユダだけを
その口づけで敬意を表す。

失寵の世界的人種よ、

汝が国民となるのはいつなのか？⁴²⁾

いつなのか？

汝の反目と不幸の時がなくなるのは

そして団結への叫びが突然鳴り響くのは？

そして我等を隔てるものが崩れるのは……？

我等は神託を待ち、信じている —

神にはその日時が分かっている……

そしてこの神の真実への信仰は

我等の胸中では死にはしないだろう、

多くの犠牲と、多くの悲しみにもかかわらず、

それでも我等は前を見る……

神は生きている — 最高の神意の人よ、

そして神の裁きは衰退しなかった、

そして『解放帝』の言葉は⁴³⁾

ルーシの境を超えて発せられる。

1867年に全ロシア民族学博覧会の一環としてモスクワで「第一回スラヴ会

Ф.И. Чюच्चेф政治詩試訳(1) (大矢 温・岡部由佳・小林慎吾・村松多恵子)

議」が開催された。ロシア国内でスラヴの民族意識が高揚する中、この「スラヴ会議」に出席するためにロシアに来訪したオーストリアやトルコ領内のスラヴ系住民の代表者は、ロシア各地で朝野を挙げての歓迎を受けた。この詩は、彼らをもてなすために5月11日にペテルブルクの貴族会議で催された歓迎会の席上で朗読された⁴⁴⁾。

この詩においてチュッチェフは、スラヴ諸民族の兄弟的友愛を謳い、『解放帝』による民族「解放」すらほのめかしている。とはいえ、現実にはロシア帝国に含まれながらそこからの分離独立を画策するポーランドは「スラヴの家族」の「恥」であり「我々のユダ」であった。

12) スラヴ人たちに⁴⁵⁾

スラヴ人たちを壁に追い詰めなければならない

奴らは叫んでいる。奴らは脅している。

《ほらこの通り、私たちはスラヴ人を壁に追い詰めている！》

奴らがどんなに離れ離れになろうとも

血気にはやったその圧力で！……

そう。壁が——大きな壁が——ある

あなたにとって壁に追い詰めることは簡単だ。

奴らに、どんな利益があるのか？

まさにこれが推測しがたいことなのだ。

その壁は恐ろしく強靱だ、

花崗岩の岩壁だけれども、——

地球一周の6分の1を

とっくの昔から巡っている……

1 度ならず壁は襲撃された……
3 つばかりの石がどこかしかで崩された、
だが、最後には、後退してしまった
割れた勇者の額と共に

壁はかつて立っていたように立っている、
戦の砦のように見える。
それは脅すためではない、
が、その石一つ一つが生きている。

猛攻撃とともに
ドイツ人にあなた方を追い詰めさせよ
その砲門へ、かんぬきへ——
そして見よう。奴らが何を得るかを！

盲目的な敵意をいかに激怒させようとも、
彼らの狼藉がいかにあなた方を脅かそうとも——
肉親の壁はあなた方を引き渡さない、
それは身内を遠ざけない

それはあなた方の前に道を開く
そしてあなた方にとっての生きた砦として、
あなた方と敵との間に立つ
そして奴らの方へと近づいていくのだ。

スラヴ会議に出席するためにロシアを訪れていたスラヴ民族の代表を歓迎する
ために、ペテルブルクに続いて5月21日にモスクワでも宴会が開かれた。こ
の詩はその折りに朗読され絶賛を博した。

Ф.И. Чувпчеф政治詩試訳(1) (大矢 温・岡部由佳・小林慎吾・村松多恵子)

エピグラムに掲げられているのはオーストリア外相フレデリック・フォン・ベイストの言葉とされている⁴⁶⁾。オーストリアにおいてドイツ人がスラヴ人を迫害しているという思想は『ロシアと西洋』でも語られている。「過去におけるオーストリアの意義とはいかなるものか？ それは一つの人種の、別の人種に対する、ドイツ人種のスラヴ人種に対する支配という事実を表している。」「スラヴ人に対するドイツ人の支配というこの事実は、ロシアによって反駁された。」⁴⁷⁾「ドイツの抑圧は単なる政治的抑圧ではなく、それより百倍も悪い。というのも、それは、ドイツ人のスラヴ人に対する支配はドイツ人の当然の権利である、と言うドイツ人の考えに由来するからである。」⁴⁸⁾

第一作の「スラヴ人たちへ」が「家族」をモチーフに身内の視点でスラヴ諸民族の連帯を謳っているのに対して、この「スラヴ人たちへ」は「壁」をモチーフに、他者からの隔離という全く正反対のアプローチで、前作と同じスラヴ諸民族の連帯を謳う、というレトリックが用いられている。

13) 宰相ゴルチャコフ公のポートレートに⁴⁹⁾

血まみれで宿命的な日々に、――
自らの戦いを中断し、
戦いで刃こぼれした自分の剣を、
ロシアが鞘に収めた日々に――

彼は至上の意志に招命された
守備に立てと、――そして彼は立ち上がった――
そして不屈の戦いを、不均等な戦いを――
一人、ヨーロッパに対して続けた。

そしてすでに12年間続いている⁵⁰⁾
その不屈の一騎打ちが――

異人種の世界は驚くが、
ルーシは容易に彼を理解する。

彼は最初に問題の本質を看破した —
そして、彼によってはじめてルーシの精神は
同盟的な力とためらいなく認められた —
そして、それこそ彼の功績の月桂冠だ。

ゴルチャコフ公在職 50 周年を記念して書かれた詩。このときゴルチャコフは、50 周年を祝して皇帝からは文官最高位に当たる「宰相」の名称を授与された。詩の中の「彼」とは当然のことながらゴルチャコフと解すべきである。チュツチェフはこの詩でクリミア戦争敗戦によってロシアに架せられたパリ講和条約のくびきを無効化するための、ゴルチャコフによる外交努力を称えている。また、国際政治の力学においてゴルチャコフが民族の問題に注目した点もチュツチェフは高く評価している。クリミア戦争において国際的に孤立していたロシアは、異民族支配下にあるスラヴ系住民に「同盟的な力」と認められたのであった。スラヴの民族性を梃子にロシアの南進を説くチュツチェフにとって、これこそ「彼の功績の月桂冠」であった。

14) Journal de St.-Petersbourg に発表された皇帝官房の至急便読後⁵¹⁾

報復が行われる時
「東」は再び照り映える —
嗚呼、その時いかに理解されようか
これらの寛大な行の意義は。

そして最初のまばゆい朝焼け光線が、

これらの行に触れて、金色に彩るとき
これらの予見的なページをも
子孫のために成聖する！

人々の感情が吐露されて――
穢れ無き神の滴のように――
謝意に満ちた自由な人種の
涙がこれらの上に落ちる……

それらは子孫のために暴く、
それらが生きた信仰によっていかに強のかを、
ありとあらゆる嘘と背信に
我々は決定的な反撃を与えたのだ……

何があったか、そして何があるのかについての
全ての物語は、これらの行に書き留められた――
ヨーロッパの内心を暴いて、
これらの行はロシアの名誉を救ったのだ。

1866年のクレタ島におけるキリスト教住民の反トルコ蜂起およびロシア国内の汎スラヴ主義的世論を背景として、ゴルチャコフ外相は今後トルコの一体性を保証しない旨を宣言し、トルコ領内のキリスト教住民への支持を明確にする。ロシアはトルコ領内の民族問題に東方問題の活路を見出したのであった。チュッチェフにとってこの宣言は、スラヴ民族解放という「天命」にロシアが着手した証であった。この詩は12月5日に発表されたこの宣言をモチーフにしているが、外務省の高官でゴルチャコフとも親しかったチュッチェフがこの宣言について事前に知っていたと考えるのが自然である⁵²⁾。

15) 無題⁵³⁾

そう、あなたは約束を守った。
大砲も1ルーブリ動かさずに、
故郷なるロシアの地は —
再び、わが世を謳歌する。

そして、私たちに遺贈された海は
再び自由な波によって
短い屈辱を忘れ、
己が故郷の岸に接吻する。

私たちの時代に、幸せ者は
血ではなく智によって勝利を得た人だ、
アルキメデスの支点を
自分自身の中に見出した人は幸せだ。

浩然たる忍耐力に満ち溢れている人は、
勘定と大胆さを両立させた —
ある時は己の欲求を抑え、
ある時は、機を見て大胆に求めた。

闘いは終わったのか？
そして、あなたの強烈な梃子は
どのように小利口者たちの頑固さと、
馬鹿者たちの無分別さ打ち勝つのか。

1870年11月3日にゴルチャコフ外相は、黒海におけるロシアの権益を制限していた1856年パリ講和条約の14条の破棄を宣言した。67年の宣言に続くゴルチャコフの強硬外交である。これは普仏戦争でナポレオン三世のフランス軍が壊滅的な打撃を受ける中でヨーロッパのパワーバランスを見定めてのことであつた。敗れたフランスにはロシアの宣言に異議を唱える余裕はなかつたし、プロシア側も講和条約を有利に締結するためにロシアの好意的中立が必要だつた。一人英国が異議を唱えたが、他の列強を引き寄せるには至らなかつた。結局、1871年にロンドンで黒海におけるロシアの権益を復活する条約が締結された。この詩は、ゴルチャコフ公爵によるこの外交的な成功をたたえたもの。チュツチェフにとっての最後の心配は「外国人におもねるペテルブルクのサロン」⁵⁴⁾の影響であつた。

16) 無題⁵⁵⁾

正教的「東」の日を、
たたえよ、たたえよ、偉大な日を、
その嘉音^{かいん}を広く行きわたらせよ
そしてロシア全体をそれで覆わせしめよ。

だが神聖なルーシの国境によって
嘉音のよびかけを阻むなかれ、
全世界に聞かしめよ、
地の果てを越えて満ちあふれさせよ、

その遠い響きで
私の血を分けた子供が
悪病と闘っている彼の谷を、
魅せながら……

運命によって彼女が流刑に連れ去られた
彼の明るい地方をも、
彼女が南の息吹の空を
葉を飲むように飲む彼の地をも。

嗚呼、病人に回復を、
彼女の心を喜びで覆え、
キリストの復活の日に⁵⁶⁾
彼女の中で生命が完全に復活するために……

2 番目の妻エルネスチーナとの間の一番下の娘マリはセバストーポリの英雄でオレーク号の船長 H.A. ビリレフと結婚したが、ほどなくビリレフは発狂し、マリも 72 年 6 月にバイエルンで結核により病死している。この詩は、表面的には娘の回復を願う詩だが、南方へのあこがれと国境を越えた正教圏という、たとえば 1849 年の「夜明け」にも共通する、チュツチェフの政治詩に特徴的なテーマが盛り込まれている。

注

- 1) “Море и утес”, 1848 г. Ф. И. Тютчев, полное собрание сочинений и письма в шести томах, М., 2002— (далее “Тютчев”), т. I, с. 197–198.
- 2) порыв は激情や急激な高まり、高揚を表すが、ここでは西欧の革命的動乱を指す。
- 3) И. С. Аксаков, Биография Федора Ивановича Тютчева, М., 1886, с. 116.
- 4) 『ロシアと革命』については大矢「Ф.И. チュツチェフとヨーロッパ諸革命」、『革命思想の系譜学』平成 8 年 7 月、中央大学社会科学研究所編所収を参照。
- 5) “Русская география”, 1848–49 г., Тютчев, т. I, с. 200.

- 6) 「ペトロの都」とはローマのことを指す。
- 7) ここでЧютчевは、皇国 царство という単語を使うことによってピョートル西欧化以後の帝国 империя、西欧の機構としての国家 государство と区別している。Чютчевにとってルーシは国 страна でも故国 родина でもなかった。
- 8) 主語は “царство”。
- 9) 旧約聖書「ダニエル書」第2章44節参照。
- 10) “Рассвет”, 1849 г., Тютчев, т. I, с. 218.
- 11) 現在のイスタンブールの中心を貫く海峡。Чютчевにとってはルーシの生命線。
- 12) コンスタンチノーポリの古称。現在のイスタンブール。
- 13) 嘉音の鐘の音 благовестный звон: 勤行の開始を知らせる鐘の音のこと。
- 14) 全地正教の日 Вселенский день и православный: 東方正教による東西両教会の統一を指している。
- 15) См. “комментария”, Тютчев, т. I, с. 509.
- 16) “Пророчество”, 1 марта 1850 г., Тютчев, т. II, с. 14.
- 17) ヴィザンチン帝国が滅亡したのが1453年なのでその後、約400年にわたって異民族の支配下にあったことになる。
- 18) イスタンブールのアヤ・ソフィア大聖堂を指す。
- 19) 再び開かれた возовновленный: 元々キリスト教徒の都市であったヴィザンチウム (後のコンスタンチノーポリーイスタンブール) をイスラム教徒から奪回して、再び国を建てるという意図が込められている。
- 20) царь России: 本来のルーシの版図をモスクワ・ロシアのツァーリが奪還するという構造。
- 21) См. “комментария”, Тютчев, т. II, с. 347.
- 22) См. “La Russie et l’occident”, Тютчев, т. III, с. 89-90.
- 23) “***”, 1850 г., Тютчев, т. II, с. 16.
- 24) 一寸法師: карлик 外務大臣のカール・ネッセリローデに掛けている。

- 25) “Спиритистическое предсказание”, ноябрь 1853г. — апрель 1854г., Тютчев, т. II, с. 63.
- 26) См. Анна Тютчева, *Воспоминания*, М., «Захаров», 2000, текст по двухтомному изданию *При дворе двух императоров*, с. 74-75.
- 27) 19世紀後半のロシア社会におけるスピリチズムの流行については、大矢「近代スピリチズムとロシア—アレクサンドル二世の「コックリさん」—」、平成14年10月、札幌大学外国学部紀要『言語と文化』第57号および「スピリチズム論争と70年代ロシア社会—迷信と科学をめぐる—」、平成15年10月、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』59号を参照。
- 28) “***”, 1855 г., Тютчев, т. II, с. 73.
- 29) “Князю Горчакову”, 1864 г., Тютчев, т. II, с. 133.
- 30) Аксаков, Биография..., с. 280.
- 31) Там же, с. 281.
- 32) Чюцчюфと検閲改革については大矢、「Ф.И. Чюцчюфと検閲改革」、平成6年、北海道大学スラブ研究センター『スラブ研究』第41号参照。政府の検閲改革については大矢、「ゲルツェンの自由出版活動と政府の検閲政策」、平成7年、ロシア史研究会『ロシア史研究』第56号参照。
- 33) “***”, декабрь 1866 г., Тютчев, т. II, с. 168.
- 34) “***”, 31 декабря 1866 г., Тютчев, т. II, с. 169.
- 35) 籍身 воплощенный : протестантで言う「受肉」。
- 36) Письмо к А. Ф. и И. С. Аксаковым от 23 сентября 1867 г., Тютчев, т. VI, с. 273.
- 37) Письмо к И. С. Аксакову от 2 октября 1867 г., Тютчев, т. VI, с. 276.
- 38) “Славянам”, начало мая 1867 г., Тютчев, т. II, с. 176-178.
- 39) 1389年にトルコ人との戦いで敗れたセルビア人の聖地。
- 40) プラハ郊外の高台。30年戦争の最中、1620年にカトリック教徒のドイツ人との戦いでプロテスタントのチェコ人が敗れた場所。チェコ人にとっては民族独立の象徴的な場所。

- 41) ポーランド人のことを指す。
- 42) 人種 племя、国民 народ：Чютчевは、彼の用語法の中で、国民国家の中核になった民族のことを「国民」、他民族の支配下にあるものを「人種」と使い分けている。
- 43) 『解放帝』1861年の農奴制改革で農奴を「解放」したアレクサンドル二世を指している。
- 44) Чютчевとスラヴ会議については、大矢「Чютчевと1867年スラヴ会議」、2004年3月、「ロシア思想史の多面的包括的再構築」2003年度年次報告集『ロシア思想史研究』第1号、を参照。
- 45) “Славянам”, 11-16 мая 1867 г., Тютчев, т. II, с. 179-180.
- 46) См. “комментарии”, Тютчев, т. II, с. 542.
- 47) “La Russie et l’occident”, Тютчев, т. III, с. 87.
- 48) Там же, с. 88.
- 49) “К портрету государственного канцлера, князя А. М. Горчакову”, 13 июня 1867 г., Тютчев, т. II, с.182.
- 50) クリミア戦争終結後、ロシアは屈辱的な条件でパリ講和条約に調印した。ゴルチャコフの政治課題はパリ講和条約の白紙撤回であった。パリ講和条約とゴルチャコフの外交については大矢、「クリミア戦争とゴルチャコフ外交 一敗戦処理と大改革一」、中央大学法学会『法学新報』、平成12年9月、第107巻3・4号、を参照。
- 51) “По прочтении депеш императорского кабинета, напечатанных в «Journal de St.-Petersbourg»”, 5 декабря 1867 г., Тютчев, т. II, с. 186.
- 52) ゴルチャコフ外交とЧютчевについては、大矢「Чютчевと東方問題」、平成11年3月、札幌大学外国語学部紀要『言語と文化』第32巻、参照。
- 53) “***”, начало декабря 1870 г., Тютчев, т. II, с. 224.
- 54) Письмо к А. Ф. Аксаковой, от 22 ноября 1870 г., Ф. И. Тютчев сочинения в двух томах, М., 1984, т. II, с. 250.

55) “***”, 16 апреля 1872 г., Тютчев, т. II, с. 238.

56) Пасхаの日に書かれた。